

令和 3 年 6 月 4 日現在

機関番号：34315

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23028

研究課題名（和文）ジャック・デリダを中心とした戦後フランスの哲学教師論の展開に関する研究

研究課題名（英文）Development of the theory of philosophical teacher in post-war France based on Derrida's thought

研究代表者

松田 智裕（MATSUDA, Tomohiro）

立命館大学・文学部・研究員

研究者番号：00844177

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦後フランスの哲学教育論の展開を「哲学教師」という観点から思想的に明らかにすることを目的とするものである。具体的には、まず、1960-1970年代のフランスにおいて「哲学教師」というテーマをめぐっていかなる議論がなされてきたのか、それがGREPHにはじまるデリダの教師論やGREPHとは別の潮流に属する教師論とどのような関係にあるのかを検討した。それにより、デリダの教師論の背景、そしてこの時期のフランスにおける議論の連続性を示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、これまで近代的な大学モデルの乗り越えという文脈で語られることの多かったデリダの哲学教育論を「哲学教師」という視点から考察することで、彼の教育論を1960年代にはじまる哲学教師論の系譜に位置づけ、この時期の思想家が教師と政治、権力、学校制度の関係性という主題を共有していたことを明らかにした点にある。これら一連の議論は「教育と政治」を哲学教育の視点から問題にしたものであるという点で、現代において前景化している「知と政治」の問題を問い直す手がかりになることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This inquiry aimed at historically clarifying the development of the theory of teaching philosophy in post-war France from the point of view of "teacher." Precisely, we pursued what argument the French philosophers of the 1960s -1970s had around of the theme "teacher" and how it was concerned with Derrida's thought of teacher in GREPH and to the other schools of teaching philosophy. By doing it, we pointed out the background of Derrida's theory of teacher and the continuities of account in France in this epoch.

研究分野：哲学・思想史

キーワード：哲学教育 教師 脱構築 ジャック・デリダ フランス思想史

## 1. 研究開始当初の背景

1970年代のフランスでは、ジスカール・デスタン政権による哲学教育縮小案に対抗する形で、デリダを中心に「哲学教育研究グループ(以下、GREPH)」が発足する。よく知られているように、GREPHは哲学教育の役割と可能性を現代の文脈から再考することを目的として開設された組織であり、その活動はフランス全土の教職員を巻き込む「哲学の全国三部会」に発展し、1983年の国際哲学コレージュ設立の土台となる。1990年にデリダの『哲学への権利』が刊行されたこともあって、近年では、GREPHの活動やデリダの哲学教育論の射程に関して優れた先行研究が登場している。その特色は、大学制度論という観点からデリダの哲学教育論を考察するというものであり、GREPHの一連の活動は、諸学を統一する「哲学」という理念に基づく教養形成の問題やフンボルト型の近代的な大学制度の乗り越えと位置づけられてきた(S. M.-Wortham, *Counter-Institutions* 2006; V. Orchard, *Jacques Derrida and the Institution of French Philosophy* 2011)。このように、大学制度論という観点から研究が進められる一方で、デリダの教育論において主要なテーマをなしたはずの「教師」の問題については、これまで十分な注意が向けられていない。フランスでは、アンドレ・カニヴェやフランソワ・シャトレらを筆頭に、「哲学教師」の問題に光があてられ、デリダも彼らの仕事を踏まえながら「教師」の身分を考察している。それに加えて、1987年にジャック・ランシエールが『無知な教師』を出版し、独自の教師論を展開していたこともあわせて考えるならば、「哲学教師」というテーマは1960年代から1990年代のフランスにおいて大きな争点であったと考えることができる。とすれば、デリダをはじめGREPHの活動を理解するためには、「哲学教師」をめぐる戦後フランスの議論の系譜を考慮することが不可欠となる。

以上を背景として、研究を開始するにあたって、「教師」の役割をめぐって戦後のフランスにおいてどのような議論がなされていたのか、という問いを設定した。この問いに取り組むことによって、1960年代～1980年代における「哲学教師」の思想史に焦点をあて、デリダをはじめとする戦後フランスの哲学教育論を哲学教師論の展開と位置づけ直すことができるのではないかと考えるにいたった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、デリダを中心とする戦後フランスの哲学教師論の展開を思想的に検討し、フランスの哲学教育論における「教師」の問題の射程を明らかにすることである。具体的には、(1)1960～1970年代のフランスにおいて、「哲学教師」をめぐってどのような議論がなされていたのか、その中心問題を抽出する。(2)それを踏まえて、デリダの哲学教師論がいかなる射程と内実をもつのか、それが1960～1970年代の哲学教師論とどのような関係にあるのかを明らかにする。(3)それを踏まえたうえで、ランシエールをはじめ、GREPHとは別の潮流に属する1980年代の教師論の展開に焦点をあて、その中心的な論点を明らかにする。

## 3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、本研究では、一次資料の精査に基づいて研究を進めた。具体的には、まず、1960～1970年代のフランスの哲学教師論に依拠しつつ、「教師」の役割についていかなる議論がなされたのか、その中心的な論点を抽出した。それを踏まえて、デリダの『哲学への権利』(1990年)の研究に取り組み、彼の哲学教師論の内実を整理し、1960～1970年代の教師論との連続性を考察した。最後に、ランシエールの『無知な教師』の読解を行い、彼の教師論の特徴やそれ以前の教師論との関係を整理した。

## 4. 研究成果

本研究を開始したときは、フランスの哲学教師論が哲学の授業における教師と学生の関係性を問題にするものと想定して、一次資料の精読に取り組んだ。しかし、研究を進めるにつれて、戦後フランスの哲学教師論の主眼が、哲学の授業のありようを直接的に主題化するものというよりも、「哲学を教える」という営みを内側から規定しているさまざまな教育制度に着目して、「教師」の地位を思考することにあることが浮き彫りになった。たとえば、カニヴェは、『哲学教師ジュール・ラニョー』(1965年)のなかで、哲学者であることと教師であることがどう両立するのかという観点から、17世紀から19世紀における哲学教師像を考察しているが、そのときに彼が着目するのは、教会と国家の関係や授業における「検閲」の存在など、哲学教育の背後にある社会状況や学校制度である。こうした視点は、シャトレの『教師たちの哲学』(1970年)にも見られるものであり、この点で、1960～1970年代フランスの哲学教師論の特色が、教育政治的な視点から「教師」の問題を思考するものであることが明らかとなった。これを踏まえたうえで、デリダの哲学教師論の研究に取り組んだ。彼は、哲学教育を構造づけている政治権力や学校制度の問題を思考している。デリダによれば、哲学の授業は、さまざまな権力や制度の存在によって重層的に規定されているのであり、彼は教師の役割を内部から規定している政治的な力関係を主題化しようとする。これらの議論に着目して、『哲学への権利』に収められた1970～1980

年代の諸論考を検討し、デリダが、「哲学教師」をめぐる教育政治の歴史に目を向けながらも、既存のものとは異なる制度を構想していることが明らかとなった。それによって、デリダの哲学教師論が1960～1970年代の教師論における「教師と教育政治」の問題系を引き継ぐものであることが浮き彫りとなった。そのうえで、ランシエールを中心に、GREPHとは別の潮流の教師論に目を向けた。『無知な教師』(1987年)なかでランシエールは、ジョゼフ・ジャコトの例をもとに、学生が自らの知性を用いるよう促す「解放」の契機を教師のなかに見たが、その際に彼は、「解放」の障害となる権力の介入を批判的に考察している。これは、1960～1970年代の教師論やGREPHの活動にもつうじる議論であり、ランシエールの教師論も教育政治の観点から「教師」の身分を考察する議論と連続的であるという視座を得ることができた。

なお、計画の段階ではフランスのIMECを訪問し、哲学教育に関するデリダの未完草稿の調査を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大の影響により断念せざるをえなかった。そのため、計画を一部変更し、同時代の社会思想の動向や1990～2000年代の哲学教育論に目を向け、関連文献の収集と研究に取り組んだ。1970～1980年代のフランスでは、ブルデューをはじめとして教育と社会空間の関係について考察がなされており、1990～2000年代にはアラン・ルノーとリュック・フェリーらが哲学教育について独自の考察を行っている。彼らはデリダとも実際に議論を闘わせた思想家であり、彼らも学校制度と学者、知識人の関係を問題にしていることから、これらの思想家も踏まえて、戦後フランスの哲学教師論の展開についてさらに考察を進めるという見通しを得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>松田智裕                               | 4. 巻<br>32(3)       |
| 2. 論文標題<br>証言、和解、赦し—デリダと南アフリカ真実和解委員会         | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>立命館言語文化研究                          | 6. 最初と最後の頁<br>77-86 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.34382/00014148 | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）        | 国際共著<br>-           |

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>エドワード・ベアリング(松田智裕訳)           | 4. 巻<br>517(15)     |
| 2. 論文標題<br>これ以上、歴史を語らないで—デリダと哲学史の問題    | 5. 発行年<br>2021年     |
| 3. 雑誌名<br>人文学報                         | 6. 最初と最後の頁<br>43-73 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし          | 査読の有無<br>無          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>-           |

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>松田智裕                                     |
| 2. 発表標題<br>分析すること、挫折すること—デリダにおける「哲学と精神分析」           |
| 3. 学会等名<br>UTCPシンポジウム「哲学と精神分析—デリダ、リクール、ラカン、そしてフロイト」 |
| 4. 発表年<br>2020年                                     |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>松田智裕                                 |
| 2. 発表標題<br>「教師」の役割とはいかなるものか?—ジャック・デリダの哲学教師論について |
| 3. 学会等名<br>教育哲学会第63回大会                          |
| 4. 発表年<br>2020年                                 |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>松田智裕                        |
| 2. 発表標題<br>『スクリッブル』を読むために              |
| 3. 学会等名<br>脱構築研究会「デリダ『スクリッブル』(月曜社)を読む」 |
| 4. 発表年<br>2021年                        |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>松田智裕                           |
| 2. 発表標題<br>年齢と時代ーデリダの哲学教育論における「諸力の闘争について」 |
| 3. 学会等名<br>日仏哲学会・2021年春季大会                |
| 4. 発表年<br>2021年                           |

〔図書〕 計1件

|                    |                 |
|--------------------|-----------------|
| 1. 著者名<br>松田 智裕    | 4. 発行年<br>2020年 |
| 2. 出版社<br>法政大学出版局  | 5. 総ページ数<br>326 |
| 3. 書名<br>弁証法、戦争、解読 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号) | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|---------------------------|-----------------------|----|
|                           |                       |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |